

# 膨らみからイメージの表現は

## インタビュー

近畿大学国際人文科学研究所  
唐十郎 所長・教授

電気を消して、  
内面的な燃える炎を  
大事にしよう。

2005年、劇団「唐組」の  
主宰者である唐十郎氏が、  
本学の客員教授に就任した。  
劇作家、演出家、俳優、作  
家と多彩な顔を持ち、独創  
性に富んだテント芝居を試  
みるなど、アングラ・小劇  
場運動の旗手として活躍し  
てきた唐教授は、大学で演  
劇学を専攻し、卒業後に劇  
団を旗揚げした舞台人。大  
学で演劇を学ぶことの意義  
や、指導する側として大切  
にしていること、学生に期  
待することなどを聞いた。

## ゼロから始まる学生が自作を演じる面白み

学内で「唐演劇塾」を開かれているそうですね。

授業とは関係なく、本当に演劇がやりたい学生を対象にした塾です。2008年2月22日から24日まで、10号館8階の演劇実習室で「動物園が消える日」という作品の上演を予定しており、キャストオーディションを行いました。「唐組」の初演は93年。金沢にあった動物園の閉園騒動から着想を得た書き下ろしで、1匹のカバを連れ出して東京をさまよう飼育係の物語です。

今までに学内で演じた自作品は三つ。作品を選ぶ基準は、構造が明解であることです。登場人物の社会的な葛藤、リアクション、モチーフなどがはっきりしていて、観ている側も分かりやすいもの。せりふ一つとっても、時代が変われば心に響くものも変わりますから、年数がたっている作品には怖さがある。しかし、学生が演じているのを見て、今の時代ならではの雄叫びのようなものを感じました。「まだ、通用するのだ」と。

私の感性が役者に浸透している劇団と違い、先入観のない学生は、ゼロからの出発。元気のある若者が、初期の作品をどういう感性で形象化してくれるのか、けいこをつけるのが楽しみです。

その他に劇団と学生とでは、どんな違いがありますか。

劇団に台本を書く時は、役者の個性をどう生かすかを重視して当てて書きします。今まで演じたことのないキャラクターなど、どんな役を書いたら面白くなるかを想定しながら進めます。

学生の場合はどんな役が合うと言えないので、演じたがっている人物の相手役と会話させるなどしながら考えます。読み合わせをしていると、思ってもいない野太い声の出る学生もいたりして、本人も驚いていますよ。学生自身、まだ自分の個性が分かっていないでしょうから、それを知るきっかけを与えることも必要です。

## 作品の根底にある演劇理論を知る

文芸学部芸術学科の授業で指導なさっている内容は？

実技科目では、戯曲の指定したシーンをあらかじめ練習してもらい、それを見てアドバイスするというやり方です。直接、演出する場合もあります。

講義では、テネシー・ウィリアムズなど西洋の戯曲や私の作品が主なテキスト。舞台上一つの役を演じるには、役柄にたどり着く前に形象化が必要です。つまり、作品の解説。劇作家の視点とは違う角度から作品に入り、なぜその役を演じたいのか、何を表現したいのかを見つめる作業です。戯曲とは、あるテーマとモチーフのもとに、登場人物の 藤 藤 起きている様を描いたもの。台本は小説と違って背景や細かい心情が説明されませんから、どういう事情で人物が絡み合い、ドラマが起きているのかを整理しないと入り込めません。荒事が展開しているようでも、そこに至るまでには繊細な時空間の流れがある。想像力をたくましくして、各自の読みを膨らませてほしいと思います。

学生の意見のぶつかり合いは、黙って聞いていても面白いですね。単なる「先生」になるのではつまらないので、同じ姿勢で臨んでいます。

唐先生は明治大学で演劇を学ばれました。大学で演劇を学ぶことの意義について、どうお考えですか。

学生時代は、興味深い先生が多くて面白かったですね。ギリシャ悲劇、シェークスピア、ロシアの劇作品など、多彩な分野の専門家に

インスパイアされました。例えば、ギリシャ悲劇の『オイディプス王』はなぜ悲劇なのか、悲劇の構造とはどういうものかを分析、解説され、「なるほど」と衝撃を受けたんです。がっしりとした演劇理論があることを知りました。

それ以前は、話題になっている戯曲や古典を読みふけり、「書き手は何を訴えたいのだろう」と考え込んでいました。一つの言葉に引っ張られるような瞬間がある、積極的なうつのような状態。それが大学で学ぶことによって客観性を与えられ、うつ性の感性がはがれた。感じ方は個人で違っても、根底に流れる共通のものもあります。特に古典の解釈は我流ではなく、大学で一通り勉強した方がいいと思いますね。私も、かつての自分に響いたように、今の若者に訴えかける戯曲であることを念頭に置いて、テキストを選んでいきます。



唐十郎(からじゅうろう)

近畿大学国際人文科学研究所長・教授、劇作家・演出家・俳優・作家。

1940年、東京都生まれ。62年、明治大学文学部演劇学専攻卒業。63年、劇団「状況劇場」を旗揚げ、主宰。67年、紅テント劇場で『藤巻きお仙』を上演。以後、野外でのテント公演を各地で行う。88年から劇団「唐組」を主宰。97年、横浜国立大学教育人間科学部教授に就任。2005年3月に同大学を定年退官し、同年4月、近畿大学客員教授に就任。07年から現職。70年『少女仮面』で岸田國士戯曲賞、83年『佐川君からの手紙』で芥川賞、03年『泥人魚』で紀伊國屋演劇賞、読売演劇大賞演出家優秀賞など数多くの賞を受賞。

## 若者ならではの試行錯誤を大切に

今と昔で学生気質が変わったと思われる点は？

60年代前半に大学を卒業した私は、「芝居をやっていれば何とかなる」と思いながら毎日を過ごしていました。劇団状況劇場を結成するまで、路頭劇、ショーダンサーのアルバイトなど、がむしゃらだった。そのころと比べると、今の学生はリアリストだと感じます。現実的な厳しさを知っていて、夢を見る時間はあっても、夢が通用するかどうかを計算するのが早い。しかし、その計算を乗り越えて、ひとつ芝居をやるうというばくちを打つようなエネルギーが生まれたら面白いと思います。

私自身も、若者の文化について聞いてみたい。例えば、携帯電話がどうコミュニケーションの窓口になっているのかといったことや、独りになった時に何を考えるのかといったことです。私が喫茶店で戯曲を読みふけたように、今の若者はどういうことを自問自答しているのか、問うてみたいですね。

学生へのメッセージをお願いします。

学んだことやけいこの内容を、家でじっと思い出してほしい。電気を消して考え込むくらい、内面的な炎が燃える展開を大事にして、イマジネーションの膨らみに触れてほしい。一人ひとりに自分なりの試行錯誤があるはず。青春真っ盛りの若者ならではの「迷子が立つ十字路」をしっかり自覚すること。それが表現することの窓口になります。